人生劇場

離愁篇

尾崎士郎著

昭和三十年五月二十日　印刷
昭和三十年五月二十五日　発行

人生劇場
定価二百三十円
（地方価　二三五円）

著者　尾崎士郎
行者　須藤酉寿
刷所　須藤印刷株式会社
東京都千代田区神田三崎町二ノ二八

発行所　春歩堂
東京都千代田区神田三崎町二ノ二八

前書き

「離愁篇」の原名は、「遠征篇」であり、これを今日、刊行するに際して、なほ且つ原名を用ひることのできないのは、すべて今日の日本が置かれた政治的理由にもとづくものであつて、作者の本意とするところではない。

この一巻は、小説「人生劇場」にとつては、むしろ外篇といふべきものであり、小説的構成は唯、末端の表現の上に加へられてゐるだけで、すべて現実生活のあまりにも正確な記録である。作者はその意味において、「離愁篇」の上梓に際し、一切の修正と加筆を避けた。この作品の発表は、昭和十八年であるから、このやうな時代と環境の中にあつて、作者がこの作品を書きつづけたことを、もし認識していただくことができるならば、作者にとつては望外の喜びである。

この作品を今日の環境と、今日の感情の角度から眺めたら、あるひは現象判断に非常な狂ひを生ずるかも知れないと思はれる。作者が一切の修正と加筆を避けたのは時代風俗の上に正しい記録を残しておきたいためである。

昭和十六年十一月から、十七年十二月にかけて、約一カ年にわたる戦場生活の印象は傍観者の眼に映る形ではなく

すべて私の肉体に泌みついた影である。私は当時、自ら嘲つて「風柳軒」と号してゐた。「風柳」は「風流」ではない。柳に風の、あの風柳である。「選ばれて徴用に任じ、誤つて青春に伍す」といふ私の言葉が当時の戦場生活をもつとも的確に表現してゐる。今にして思へば、この空白の中に私の人生が埋没してゆく過程が「離愁篇」の動機であつたとも言へやう。

もし、二度び三度び生れ変ることがあるとしてもこのやうな経験をくりかへすことはあるまい。よしんば悲痛なる昨日の日が、今日の滑稽に変らうとも、真実を偽ることは出来ないのである。特にそのことを一言しておきたいと思ふ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人生劇場（第五巻）離愁篇　目次

目次

前書き……一
序章……七
第一歩……三
除夜……四
銀の月……十
海の眺望……十八
生活……九

春又秋……一一七
モロンの秋……一四一
悪魔……一五六
総攻撃……一七九
火樹……二〇三
遠雷……二三五
残照……二三八
水族館……二五一

人生劇場

（離愁篇）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　章

小塚准尉が忌まいましさうに天井を見あげた。

「本を読むと、みな同じやうに書いてありますな、光陰は矢のごとしだとか、歳月人を待たずだとか」

太くはじけるやうな声である。

「青成さん、さう思ひませんか、私たちは毎日時計ばかり見て暮してゐる、ところが、朝になる、昼になる、やがて夜になる、――たしかに光陰は矢のごとしにちがひないが、朝が夜になつても同じことぢやありませんか、今日でもう二十日になりますよ」

船はたしかに働いてゐるのであつた。今となると小塚准尉にとつては働いてゐることさへもどかしくつてたまらないのである。進んだと思ふとまたうしろへ戻つてゆく。右に航路が変つたと思ふと何時のまにか左に向きが変つてゐる。敵の潜水艦を避けてゐるのだといふことは、一応わかつてゐるにしても、長い海上の待機の日がすぎて、やつと動きだしたぞ、と勢ひたつてゐただけにもどかしくて堪らぬのである。

「いや、動いてゐるときには、かへつて動いてゐるやうな気がしないものですよ。まだ若い若いと思つてゐるうちに時がすぎてしまふやうなものさ、何時の間に年をとつたのかと、あとになつて考へてみるんだが、そのときにはもうおそい、そんなものですよ、人生なんていふものは」

青成瓢吉はさういふ感慨を洩らしてみたかつたのだ。半白のといつても、染めた髪を洗ひ落せばほとんど黒髪は数

へるほどしか残つてゐない、どうにもごま化しきれなくなつたその頭髪を片手でかきあげた。伸びるにつれて根元だけ葱のやうに白くなつた髪が、早くも青春の消え去らうとする彼の人生を象徴してゐるのである。

船の動きと年令の変化とに何のつながりのあるべき筈もなかつたが、しかし、今年四十五歳の青成瓢吉にとつては、時の過ぎてゆくといふことさへも、唯それだけで切なく佗しかつた。

「さあ、一杯ゆきませう。最後の一滴です」

准尉はさういつて台湾酒の四合罎を大きく振つてみせた。遠藤も赤井も、西も、みんな酔つてゐる。小塚准尉は、みんなの茶碗へ等分に酒をつぎ入れると、左手を胸にあて酔つたときの何時もの癖で、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、——と、一区切りごとに語尾に力を入れて笑ひだした。

「青成さんはゐませんか？」

カーテンのそとから、たるんだやうな声が聞えて、ボーイ頭の船木艦洋が首をつきだしたのである。眼が窪んでゐるので老けて見えるが、年はまだ二十をすぎて間がないと思はれる。若さの乾からびた、しなびたままで一生を終りさうな顔であつた。

「あなたに会ひたい人がゐるんです」

「何、——おれに？」

青成瓢吉は、左手で腰をたたき、急にいきいきと眼を輝かした。ハッチの底の将校室は人いきれでむんむんしてゐる。

先きに立つた船木艦洋は廊下の曲り角までくると、

「こつちです」

といつてうしろを振りかへつた。賄室のすぐうしろにある階段をのぼるとBデッキの横へ出る。

サロンの入口に、少尉の肩章をつけた、ほそ面の口髭を生やした男がシャツ一枚で立つてゐた。

「やあ、これはわざわざ」
品のいい微笑をうかべ、自分は陸軍通訳の下村といふものです、といつてから、
「実はこの船にフィリッピンの志士がのつてゐるんです」
「志士？」
「ええ、独立運動の志士なんですがね、案外何かの材料になるかも知れませんよ。どうです、お会ひになつてみては？」
「それはどうも」
瓢吉のうなづくのを見て下村は、
「ぢやあ」
といつてサロンの廊下を通り、両側に「上長官」の部屋のならんでゐる通路の片隅にある小さい部屋の扉をあけた。部屋の半分はベッドで床の上には大きなトランクが積みかさねてある。色の黒い猿のやうな顔をした男がテーブルによりかかつて何か書きものをしてゐたらしい、ぴくつと跳ねあがるやうな恰好で二人の前に突つ立つた。
「こちらがカランバカールさんです」
下村少尉は物静かな調子でこの男を瓢吉に紹介してから、こんどは英語で瓢吉を改めてこの男に紹介した。カランバカールは急いで名刺を瓢吉の手にわたし、
「ヨロシクネガヒマス」
といつてぐつと胸を張り、幾分相手を見下すやうな表情でにやにや笑ひながら手を差しのべた。
カランバカールの名刺には英語の横に「卜拉母白克爾医師」といかめしい漢字がならんでゐる。
「どうぞ御遠慮なく何でも訊いて下さい」
下村少尉はさういつて片隅の椅子を瓢吉にすすめ、自分もその横の籐椅子に腰をおろした。

どんなに若く見ても年令はもう五十はすぎてゐるであらう。厚い唇の上にちよび髭を生やしてゐるのが何か下品な、性慾的といふよりもむしろ食慾的な感じである。

「あなたは日本語がしやべれますか？」

と瓢吉がきくと、

「ワタシ、モウ、タクサン、ワスレマシタ」

カランバカールは片手で蝶形のネクタイをなほし、ちよつと沈痛な顔をしてみせてからこんどは調子のついた英語でペラペラとまくしたてた。

黙つて聴いてゐた下村少尉の表情が少しづつ硬化してきたと思ふと、彼はもどかしさうな苦笑ひを浮べて、

「大将、だいぶ法螺を吹いてゐますよ、フィリッピンは今こそ日本と協力して独立する準備をしてゐるのだ、自分の同志は二十年振りで自分のかへるのを待つてゐる、全フィリッピンに独立の旗のひるがへるのも遠いことではあるまいと云つてゐるんです」

「すると」

瓢吉がカランバカールに問ひかけた。

「あなたは今まで何処にゐられたのです？」

「ワタシ、トウキョウ、シッテイマス、トモダチタクサンイマス」

それからまた英語でしやべりだした。下村少尉の通訳によると、今は上海で医者をしてゐるが自分は日本から受けた好意を終生忘れることはあるまい。自分も今日まで流浪の旅を重ねてゐるが古往今来、革命家のゆく道は同じである、といふのである。

テーブルの上においたカランバカールの指先から眩しく光るものがあつた。それがくすり指にはめたダイヤモンドだといふことがわかると、瓢吉は不遇を嘆つこの革命家の感慨と照し合せて妙な気持になつたが、しかし、このとき

カランバカールは早くもトランクの上にあつたスーツケースの蓋をあけ小さい箱をとりだしてゐた。
「コレミンナ、ワタシノトモダチ」
箱の中から大切さうに名刺をとりだしたのである。その一つ一つを拾ひあげてみると、すでに故人になつた政治家が多く、その中には大隈重信とか後藤新平とかいふ人たちの名前もあつた。
「あなたの奥さんはフィリッピンにゐらつしやるんですか？」
「ワタシ、オクサン、フィリッピンニタクサンイマス、ニホンニモオクサンタクサンアリマス。ニホンノオンナトテモシンセツ」
眼をほそめてにやにや笑つたと思ふと、こんどはトランクをあけて部厚なスクラップブックをとりだした。中に貼つてある写真は彼の若い頃のものらしく演壇に立つて何か叫んでゐるやうな姿には精悍の気がみちみちてゐるし、五六人の青年たちがかたまつてゐるどの写真を見ても彼がまん中に傲然として立つてゐるのだ。この調子でみると、カランバカールが自称して独立運動の志士といふのも満更嘘や法螺だけではないらしい。その写真帳の最後の方に眼鼻立ちの整つた見るからにスマートな青年が洋装した若い女の肩にもたれかかつてゐる写真があつた。
「この男の人は？」
瓢吉が指さすと、カランバカールはいかにも待つてゐたといふ感じで、
「コレワタシ」
甘えかかるやうな声でニタリと笑つた。
なるほどさう言へば顔の輪郭にもどこか似通つたところがないわけでもない。しかし、このきりつとひきしまつた青年の相貌は今日の彼の萎びたままに煤けてゐる老醜のみすぼらしさとおよそ縁もゆかりもないものであつた。瓢吉はとたんに共感をこめた哀れさがどつと胸にこみあげてくるのをおさへて、
「こつちのひとは？」

と女の方を指さした。
「あなたのおくさんですか？」
「コレ」
カランバカールが冷然として首肯いた。
「コレ、メカケ」
落ちつき払つて卓上の小さい鏡に顔を映してゐるこのフィリッピンの革命家を見ると、瓢吉はたちまち夢から覚めたやうな味気なさを覚えた。
すると、下村少尉が横合ひから、
「あなた方は甘いものにお困りでせう。羊羹ならカランバカールが持つている筈です」
と突拍子もないことをいつてから、急に厳然たる態度で、
「青成さんに、ひとつ、さつきの羊羹を御馳走して下さい」
「ア、ヨウカン——ニホンノヨウカントテモオイシイ」
さういつてカランバカールはまたトランクの蓋をあけ台湾製の羊羹のまだ半分ほど残つてゐるのをとりだした。それを一切だけ喰べてから慌ててお礼をいつて外へ出ようとすると、カランバカールはすぐ立ち上つて瓢吉の手を握りしめた。
「ワタシ、ニホンノタメニヤリマス、アナタワタシノトモダチ」
たるんだ頬に深い皺を寄せてにやにやと笑つた。
デッキの上には半裸体の男たちがみんな同じやうに夜空の星を仰いでゐる。昨日と比べて星の位置の変つてきたことがはつきりわかるのである。
「ところで」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com